



「大変だったね、一緒に頑張ろう」
「こういう時は、お互いさまだから」
「くよくよしても、仕方ない」
この町にあるあたたかさや強さが
復興を押し進めてきた。



いつか震災の経験者はいなくなる。
震災を知らない世代にも
この町であったことを伝えよう。
これから先も、ここにある
笑顔を絶やさないように。



ここにある笑顔と未来 ずっと守りたい

震災を乗り越えた先にあった、この笑顔。
次世代が思い描く未来へ向かって、ともに歩んでいきましょう。

震災を胸に刻んで、前へ

さまざまな形で向き合う震災の記憶。
あの日の出来事を胸に刻み、いま思いを新たにします。

東日本大震災発生時は、町内会長として、町内をパトロールしながら各世帯に食料などの救援物資を届けたり、伊達崎公民館で浪江町からの避難者を受け入れたりしていました。とにかく皆さんを守ろうという一心で、自宅に戻れたのは、震災発生から3日後のことでした。

あれから10年、みんなで「大丈夫」と声を掛け合い、共に前を見つめ合い、平穏な日常を取り戻しつつあります。その間にも、イコーゼや災害公営住宅ができたり、桑折ジャンクションや伊達桑折インターチェンジ、役場新庁舎が完成し

たり、多くの企業が進出したりと、周辺の環境が大きく変化してきました。これも復興の表れだと感じています。

先日、震災から10年という節目を迎える矢先に大きな余震が発生。「災害は忘れたころにやってくる」という言葉が頭をよぎりました。きっと多くの人が東日本大震災を思い出し、「3.11を忘れない」と、改めて防災について考えるきっかけになったのではないのでしょうか。過去の災害を教訓として語り継ぎ、みんなで安全安心に暮らせる町をつくっていき



行政連絡員連合会会長
佐藤 久仁夫さん

Interview



当時中学生
佐藤 淳史さん



浪江町から避難
中目るみ子さん



町消防団団長
津田 次男さん

今でも鮮明に思い出す大きな揺れ。被災した経験が自分の中での「転換期」となりました。生徒会長へ挑戦したのも、東京の大学へ進学後、地元へ戻って就職を決めたのも、震災がきっかけです。日々何となく過ごすのではなく、明確なビジョンを描いて生きようと強く思うきっかけになりました。

家族で原町へ出かけていた時に被災。急いで車を走らせる最中、「海の方がキラキラしている」という子どもの言葉にハッとし、浜へ目をやると津波が押し寄せていました。何か所も避難所を転々とし、友人と桑折町の仮設住宅へ。助けてもらった感謝の気持ちを忘れず、恩返ししていきたいです。

震災発生時は、副分団長として、避難所運営や道路破損による通行止めに対応しました。避難所に人が押し寄せると、十分な機能を果たせなくなります。2次災害を防ぐためにも、慌てない行動や最低3日間分の食料を確保することが大切です。今後も気を緩めず、万一の災害に備えましょう。

あの日から10年。まるで「東日本大震災を忘れるな」というメッセージであるかのような、2月13日に発生した巨大余震。復興を成し遂げる中、改めて自然災害の恐ろしさを思い返す出来事となりました。

あの年生まれた子は小学生になり、あの時中学生だった子は社会の荒波にもまれていきます。浪江町から避難してきた人は、仮設住宅から災害公営住宅へ移り住んだり、別な地で新居を築いたりしています。誰にも等しく10年の月日が流れました。

町が復興へ歩みを進めると、被災の爪痕を残した家屋や建物は姿を消します。それでも、あの日学んだ教訓は忘れてはなりません。「あんな大地震、もう来ないと思っていた」「油断していた」。今回の余震は、10年前を思い出すきっかけになったのではないのでしょうか。今こそこの節目に、震災を振り返り、改めて防災について考えましょう。震災の記憶を風化させないため、そして、自分自身と大切な人の命を守るためにも――。